



# 筑紫女学園大学リポジット

宝満山周辺の植生史と里地・里山の利用の姿 :  
高雄山頂・大行事とは

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2014-02-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 冷川, 昌彦, HIYAKAWA, Masahiko<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/125">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/125</a>                   |

# 宝満山周辺の植生史と里地・里山の利用の姿

- 高雄山頂・大行事とは -

冷 川 昌 彦

The history of vegetations at Mount Homan and  
vegetative state for Satochi - satoyama thicket.

- “Daigyouzi stone monument” on the top of Mount Takao -

Masahiko HIYAKAWA

## 現在の植生状況

### 宝満山の植生

宝満山一帯は現在、自然林および二次林、植林などで覆われている。標高730mの中宮跡付近から宝満山、仏頂山にかけては自然林が多く、照葉樹林帯上部のアカガシ群落と夏緑樹林帯下部のブナ群落、本来は中間温帯の植生であるモミ群落が混生している。部分的にはそれぞれの群落の典型的な姿も見られるが、大部分はそれぞれの群落の代表的な樹木が混生している。宝満山での各群落を構成する代表的な種は次の通りである。

ブナ群落：ブナ、コハウチワカエデ、シラキ、ウラジロノキ、アカシデ、イヌシデ、オオカメノキ、シロモジ、コバノミツバツツジ、ウンゼンカンアオイ（草本）など

典型的群落の生育地 宝満山頂直下の仏頂山側尾根筋、頭巾山付近の西側斜面

モミ群落：モミ、カヤノキ、キッコウハグマ（草本）などモミ群落を標徴する植物の他、アカガシ群落やブナ群落の種群

典型的群落の生育地 仏頂山西側尾根

アカガシ群落：アカガシ、シキミ、ハイノキ、ツルシキミなどのアカガシ群落の標徴種のほか、ヤブツバキ、シロダモなど照葉樹林の代表種、ブナ群落を構成する多くの種群

典型的群落の生育地 座主院跡から水場にかけての東側上部斜面

この他、老大木を含む古くより植林されたスギ・ヒノキ林も、女道から座主院跡にかけての南側斜面を中心にかなりの面積を占めている。これらの林齢の古い上部植林の中にはブナ、モミ、アカガシ群落の種群も混在している。なお、旧林野庁作成の林班地図によれば、仏頂山北西のモミ林の林齢は約160年である。

宝満山から三郡山にかけての、これらの自然林は太宰府県立自然公園の中心部分であり、標高700m以上は第1種・第2種・第3種特別地域に指定されている。また環境省から、三郡・宝満山の自然林として、特定植物群落に指定されている。

二次林（雑木林）は30～40年前までは定期的に伐採され炭焼などに利用されていた林分である。

西暦1960年代までは、晩秋から冬場にかけて仏頂山から三郡山にかけての尾根筋で、良く炭焼の材料として林木を伐採する姿が見られた。この時代の縦走路は一部の急斜面や谷筋を除いては、2～3m前後の低木林が中心であった。その後、高度経済成長期に入ると同時に、電気やガスを使用する日常生活スタイルの変化から二次林の利用が無くなり、現在では10～15mの落葉広葉樹林（シデ群落）に成長しており、春の新緑や秋の紅葉は見事である。主な樹種は次の通りである。

コハウチワカエデ、アカシデ、イヌシデ、シラキ、タカノツメ、ネジキ、リョウブ、タンナサワフタギ、カマツカ、ウラジロノキ、コバノミツバツツジ、オオカメノキ、ヤマボウシなどの落葉樹が中心で、この中にアカガシ、モミ、シキミ、ヤブツバキ、ハイノキなどの常緑樹が点在している。

宝満山頂から三郡山にかけての、主尾根を走る縦走路の筑紫野市側斜面の一部ではモミの植林も行われている。現在ではかなり成長しており立派なモミ林として成長を続けている。また、その下部から三郡山頂にかけての広大な面積の、アカガシを中心とした雑木林も成長を続けている。数十年後には立派な常緑落葉混交林が見られると思われる。

中宮跡上部から羅漢道沿いの西側斜面は主にアカガシ林となっている。式部稲荷上宮付近では大木も見られるが、急斜面や巨岩の露出部分も多く樹木の生育条件は良好とは言えない。しかし、絶壁の下部では土壌の堆積も見られ、部分的にブナ林が生育している。ここのブナ群落は、九州で最も標高の低い場所（650m付近）で生育している貴重な群落である。羅漢道沿いには、天台宗開祖の伝教大使・最澄が唐に渡る前に、航海安全を祈願するため籠もっていたと伝えられている”最澄窟”がある。

標高600m付近から下部はスギ・ヒノキ植林地と、アカガシのほか、シイノキ、タブノキ、ウラジロガシ、ヤブツバキ、クロキ、ハイノキなどの照葉樹林の樹木を交える植生となってくる。かつては落葉樹も交えた典型的な雑木林であったが、今では樹木が成長した部分は立派な自然林的な様相を示した林分が見られる。

宝満山山麓では、鎮守の森を中心に典型的なスダジイ群落が見られる。その代表は竈門神社本殿裏の社叢である。胸高直径80cmのスダジイを始め、スダジイの大木が群生し、イチイガシ、サカキ、ヒメユズリハなど典型的な社寺林構成種を始め、アラカシ、ヒサカキ、ネズミモチ、カクレミノ、ネズミモチ、ヤブツバキなど典型的な照葉樹林構成種が生育している。この森は、竈門神社のスダジイ林として、環境省の特定植物群落に指定されている。

宝満山東斜面の山麓には、筑紫野市柚須原、本道寺の各大山祇神社、大石の高木神社など各集落の鎮守の森に巨木や老木が生育している。柚須原大山祇神社のイチヨウ、本道寺大山祇神社のシイノキ、大石高木神社のムクノキは、筑紫野市の5大木の中に入っている。この他、柚須原大山祇神社のタブノキ、モッコク、ヒノキ、大石高木神社のシンジュノキ、マキノキ、ケヤキなど見事な老木である。また、本道寺大山祇神社裏の社叢林は、小規模であるが立派なスダジイ林である。

### 里山雑木林

かつては、山麓から中腹にかけての尾根筋には広くアカマツ群落が見られた。高木層はアカマツ

が優占種し、ヒサカキ、ネズミモチ、クロキなどの常緑樹や、コナラ、ネジキ、リョウブなどの落葉樹が亜高木層や低木層に見られる典型的な里山群落であった。草本層はウラジロやコシダが中心で、林床の植生が貧弱なところでは秋にはマツタケなども見られた。しかし、里山の利用が無くなった1970年頃から林床の富栄養化が進行し、アカマツが次第に弱ってくると共にマツノザイセンチュウが寄生し、やがて松枯れが進行してアカマツ群落は消滅してしまった。山麓や中腹のシイ・カシやコナラ・リョウブなどの常緑・落葉混交二次林（雑木林）は、かつてのアカマツ群落のその後の姿である。

現在、山腹や山麓の集落上部などに見られるスギ・ヒノキ植林や竹林は、古代～近代までは、生活利用林としての雑木林や原野・草原＝牧場・茅場など、榛莽地<sup>しんぼう</sup>や薪林地<sup>しんまつ</sup>（これらの言葉は、里地・里山の群落を表現する用語である。）として里山利用されていた部分である。家具の部品、クワなど農具の柄、お椀や箸、竹編みの籠など、各種用材として使用されていた。このような雑木林や草原・原野の里山利用は40～50年前で終わり、国の指導により順次植林が行われた場所である。現在、これらの林の多くは手入れが行き届かず、その多くは荒れた植林となっている。

\* 保護指定の状況

太宰府県立自然公園 普通地域：山麓部分を含むほぼ全域

第1種特別地域：西院谷付近から三郡山の主尾根及び斜面全域

第2種特別地域：三郡山から砥石山方面にかけての主尾根

第3種特別地域：第1種地域を除く、標高700m以上の全域

環境省指定特定植物群落 三郡・宝満山の自然林 竈門神社のスタジイ林

### 雑木林の植生

秋晴れの日、校舎の窓から高雄山を眺めると、深緑色のスギ・ヒノキ植林の尾根と紅葉した樹木を交えた色々な緑の葉を持つ広葉樹が生育する尾根とが交互にあることが判る。20年前頃までは、まだ樹木が比較的若く枝張りも小さかったが、近年は樹木の成長が著しく、枝張りが大きくなり、遠目にもこんもりと繁った様子が判るようになってきた。新緑が目立つ4月から5月にかけては、常緑樹と落葉樹の新葉が呈する色々な緑が混在し、日光を浴びて目を見張るような緑の景観を呈するようになっている。落葉樹の新緑は一般に薄い緑色をしているが、常緑樹の新葉の中には、クスノキ、ハイノキ、ヒサカキ、ウバメガシ、ハゼノキなど、薄黄色から赤、紫色まで色々な色を呈するものも含まれる。

雑木林は大まかに3つのタイプに分類される。シイノキやタブノキを中心とした常緑樹主体の林、シイノキなどの常緑樹とコナラ、ハゼノキなどの落葉樹が混じる常緑・落葉混交林、クヌギ、コナラなどを中心とした落葉樹主体の林などである。高雄山の山中に生育する雑木林は常緑・落葉混交林が殆どである。

常緑樹と落葉樹が混交した雑木林は、シイノキやタブノキのほかクスノキ、アラカシ、クロキ、ナナミノキ、シャシャンボなどの常緑樹と、コナラ、ハゼノキ、リョウブ、ネジキなどの落葉樹が混在して高木層、亜高木層を形成している。低木層は一般にヒサカキが優占し、ネズミモチ、ヒメ

ユズリハ、シロダモ、タブノキ、シイノキなどの常緑樹や、サルトリイバラ、ミツバアケビ、ヤマフジなどのつる植物が多い。草本層は環境に応じネザサ、コシダ、ウラジロなどが優占している。

常緑樹と落葉樹が混成する雑木林はかつてはアカマツ林であった林分が多い。今でも尾根筋の一部や山上の土塁付近ではアカマツが残存し点在している。また、林内の一部では枯死し倒壊したアカマツを確認することが出来る。

### 鎮守の森など

御笠地区の緑地や鎮守の森としては、柚須原、本道寺の大山おおやますみ祇神社、大石の高木神社、東吉木の高良社、中阿志岐の荒船神社などの森がある。これらの地域の大木・巨木の記録は、筑紫野市御笠コミュニティセンター主催講座「身近な自然を見てみよう」に参加された方々の手による調査報告書、「身近な自然を見てみよう 鎮守の森と自然」に詳しく記載されている。この講座の講師は冷川が務めた。

### 御笠の自然・昔の姿

宝満山は、福岡都市圏に位置しながら、県内でも有数の自然植生に覆われた山である。四季折々に山中を歩くと、季節ごとに感動的な風景に触れることができる。このような自然景観が完成したのはどの時代からと考えられるか。昔の自然の記録は文字として残されたものは少なく、僅かに江戸後期の絵画が残されているのみであることから、推測の域は出ないが振り返ってみることにする。

宝満山（竈門山）が歴史に登場するのは8世紀頃からである。竈門山で最澄が唐への安全渡海祈願をしたのは803年のことである。この時代、竈門神は大宰府政庁の守護神として祀られていた。この頃には山頂までの登山道はすでにあったと思われるが、山中に人がどの程度住んでいたかどうかは不明である。山頂付近の植生は原自然の状態に近かったと思われるが、山麓や山中の有用な樹木類は、この時代前後に盛んに建築が行われた、政庁や寺院などの巨大な建築物にかなり利用されていたと考えられる。

大宰府政庁が設けられた時代、福岡平野南部はすでに里地・里山化されていた。西暦664年に水城堤が造成された頃、すでに付近の山はシイノキやアラカシなどの若木が繁る里山であった。水城堤の基礎部分には、これらの若木の葉の付いた枝が敷き詰められている。また、この時代は牛頸山の山麓から続く丘陵部は、西日本最大の須恵器の生産基地であった。現在までに約580ヶ所の窯跡が出土している。付近一帯は須恵器を焼くための燃料供給基地であり、アカマツを含む雑木林となっていた。福岡平野南部の景観は、平野部には水田が拡がり、丘陵部～山麓部は畑や薪炭林用の雑木林が拡がる。また、家の屋根材にするススキ草原が拡がる、典型的な里地・里山景観がすでに成立していたと考えられる。このように想像すると、宝満山は建築用材や薪を供給するための山になっていたと考えても不思議ではない。

中世の竈門山は修験道の道場として栄え、山中には370坊の宿坊があったと記録されている。江戸期にはいと、宿坊は25坊と少なくなるが、この時代は家族も同時に住んでおり、下男下女を含めると、かなりの人数となる。1坊当たり10人前後の人が住んでおり、山中全体では少なくとも数

百人の山伏や、使用人達が山麓から山中にかけて住んでいたことになる。これだけの人数が生活するためには、どの位の面積の里山・雑木林や茅場が必要と考えるか。19世紀初頭の1820年頃に著述された、奥村玉欄著「筑前名所図絵」中の竈門山図から推察すると、誇張はあるものの岩峰を中心に描かれており、全山がほぼ里山の景観であったことが判る。山中で生きる修験者の生活を維持するためには、里山的環境は必修であったと考えられる。ただし現在も山中に点在するスギやモミの大木・巨木等は、神の住み処として神祭りの対象であったと考えられ、当時から保護されていたと思われる。

また、江戸時代中期に定められた「竈門山水帳」にある取り決めで、一定の樹木の保護・管理が行われてきたと思われ、特に寺社周辺は自然林的景観であったと思われる。特に、水帳にある6種の樹木、松・榎・杉・桜・椎・タブ（タブ）は厳しく保護されてきた。それぞれの樹木は次の通りと思われる。

松 = アカマツ。建築用材に利用。

榎 = トドマツ これは亜高山帯の植物で北海道にしか自生しない。モミを指していると思われる。

杉 = スギ。建築用材に利用。

桜 = サクラ この時代、ソメイヨシノはまだ存在せず、ヤマザクラと思われる。建築用材に利用。

椎 = シイノキ。シイにはコジイとスタジイがあるが一定以上の標高ではコジイが中心である。

タブ = タブノキ。照葉樹林帯の比較的上部まで生育する。葉は線香の原料とした。

参考資料として、福岡県地理全誌（明治15年 = 1881年）の北谷村の記録を見ると、戸数62戸、人口314人、牛63頭、田畑31町、山林272町（内訳・官林181町、草山77町、元預山14町）とある。明治初期に、宝満山麓の台地上の生活でこれだけの面積が必要であったことから考えると、中世から江戸期にかけて宝満山中で日常的に生活するためには、少なくともこの数倍の面積が必要ではなかったろうか。

地理全誌内山村の記載によると、竈門山は「満山尽く岩石にして、その形状良工の削成せるが如し」とある。また、山中にヤマザクラ、カエデが多く、霜のあとでは紅錦を張るようである。ツツジが数種類あり、カンアオイやヤマブキソウなども生えている。その他異木・異草が多く枚挙すべからず、と記されている。また、仏頂山の項には、この山には岩石や樹木はなく、茅茨（カヤとイバラ）のみが生えていると記載されている。但し、北谷村の項では「雑木草立なり」と記載されている。これらの記載から判ることは、仏頂山の山頂から斜面上部にかけての植生状況は、榛莽（1m前後の低木が生育し、薪炭利用をしていた植生）の状態であったと判断できる。また、地理全誌の記載に「竈門山は春は桜、秋は紅葉が綺麗な山である」とある。

このような植生状況は1950年代まで継続していた。この時代、秋から冬にかけて登山すると、仏頂山から三郡山～砥石山の尾根筋では、良く炭焼の人達に出会っていた。宇美町には炭焼という地

名があるが、ここの集落の人や、筑紫野市柚須原の人達と尾根筋で出会っていた。また、尾根筋の植生は樹高2～3m程度の落葉樹が中心で、典型的な低木林であった。これらの樹木を切り出して、谷筋で炭焼が行われていた。三郡山の筑紫野市側斜面は、かつては樹高3～5m程度のアカガシヤコナラ、リョウブなどの広大な雑木林であった。筑紫野市柚須原上部の、三郡山への登山道がある谷筋には巨大な炭焼窯の跡が点在している。

### 宝満山麓及び周辺の山々の植生状況

筑紫野市大石上部の大行事原は、1970年代までは原野として残されていたが、その後クヌギ・コナラの植林が行われた。近年伐期が来たため伐採されたが、切り株からの萌芽が芽生え再び成長を始めている。新緑の頃は林床の至る所でシュンランが咲き、チョウが飛び交っており、秋には一斉に落葉して幹や枝だけとなり明るい林となる。柚須原、九重ヶ原など、〇〇原という地名は各所に点在しており、かつて集落付近にあった草原などの原野を呼んでいたものである。明治時代の統計資料から、国土の12～13%は草原・原野であったことが判る。宝満山麓の集落に近い雑木林にはアカマツ林も多かった。アカマツ林は尾根筋の比較的貧栄養な土壌で生育し、低木層や草本層は貧弱で、燃料用として松葉掻きが行われていた。

高雄山は典型的な里山の姿を止めている。かつては山全体が里山利用の対象であった。山頂付近はススキを中心とした草原・原野が広がり、茅場・牧草地として利用され、山麓から尾根筋にかけては薪林地で、薪炭用材の採取場として利用されていた。近年までアカマツ林が多かった。高木層はアカマツ、亜高木層以下にコナラ、リョウブ、ネジキ、ハゼノキ、カラズザンショウ、ヒサカキ、ネズミモチ、草本層はウラジロやコシダに覆われていた。スギ・ヒノキの植林が始まったのは40～50年前からである。

### 大行事～大行司と草原

大石・高木神社の鳥居には大行事という額が掛かっているが、これは上部の原野の中に祭ってあった神を指すものと思われる。地理全誌内山村の項に大行事原の記載がある。「一の坂の下にある廣野なり。昔松尾大行事社ありて松尾寺という守坊もありしが、野火にて焼けし故に、社は大石村に移し松尾寺の本尊及び仏体の焼け残りたるは皆埋めて、塚を築けり。この塚、今も大石村にありて、一三塚と言う」と記載されている。大学の裏山、高雄山の山頂にはしめ縄が巻かれた大行事の石碑が建っている。高雄山は、山の半分が筑紫女学園大学のキャンパスである。

「大行事」の石碑と地名は旧御笠郡を始め、近隣の各地に点在している。大学付近では龍門神社の境内、筑紫野市柚須原、本道寺の大山祇神社境内や参道、天山高木神社の鳥居や石灯籠、四王寺山麓の太宰府市民の森の山中に2ヶ所、大野城市乙金の宝満宮参道、同市平野台の浄水場付近、筑紫野市平等寺の大行事公園など、近隣で確認出来ているものだけでも15ヶ所に達する。いずれも近代まではススキを中心とした草原・原野であった場所で、日常的に茅場・秣場として利用されていた。茅葺きの屋根材、牛馬の飼料、堆肥作りなど毎日の生活に欠かせないものであった。

「大行事」は、寺院における法会の際に、準備、法式儀則など万般の指揮をとる僧のことを言う仏語で、大行事神も当初から仏教擁護の善神という意味があったと思われるが、山王一実神道ではより具体的に、大行事権現を、猿田彦神あるいは皇尊産霊尊（たかみむしびのみこと）に習合させ

て、山王権現の惣後見と言い、山王権現勧請の場所には必ずこの神を奉齋すると説いている（厳神鈔）。県内では彦山がその神領内に48ヶ所の大行事社を置いたというのが顕著な事例であるが、太宰府市、筑紫野市などを始め、筑後～朝倉地区に大行事と刻まれた石塔が50数カ所に亘り散在しており、作神あるいは牛馬神、疫神などの信仰を維持している。いずれも天台系寺社による山王信仰宣布の一翼を担っていたと思われる。

大野城市の牛頸山山麓では、昭和の初めまで毎年秋の一日、大行事の石碑の前で、各集落から若者の代表が出て相撲を取り、草刈りの順番を決めていたそうである。この日は市が立ち、露店なども出て子供達にとっては楽しい一日であつたことである。

### 地名解説

御 笠 郡：古代～近代の郡名。

範囲は現在の大野城

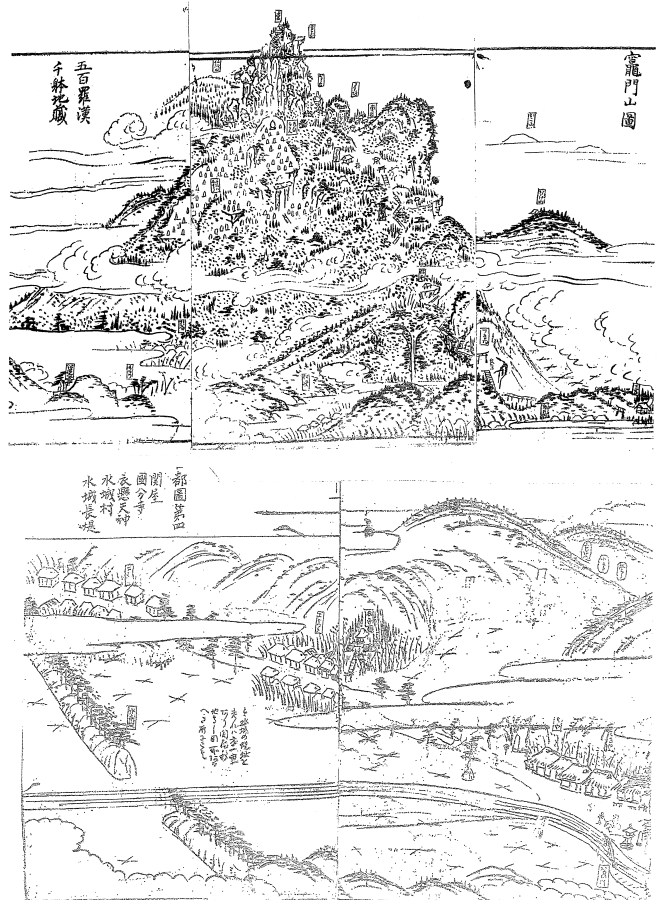
市、太宰府市、筑紫野市。古代は御笠・長岡・次田・大野の4郷で構成。中世は御笠東郷・西郷の2郷に別れていた。近世初期には52ヶ村、中～後期には57ヶ村が置かれた。1812年（文化9年）には山家・山口・下大利の3触に分けられ、それぞれの触は大庄屋が統括した。明治11年に近代の郡として発足。

御 笠 村：明治22年～昭和30年の自治体名。最初は御笠郡、明治29年より筑紫郡に所属。柚須原、香園、本道寺、大石、原、吉木、阿志岐、牛島、天山の9ヶ村が合併して成立する。村名は、御笠は「和名抄」に見える郷名であり、かつ当地が御笠山の麓に立地することにちなむ。昭和30年、筑紫野町の一部となり、各村名は大字として現在も残されている。

宰 府 村：古代～近代（明治22年）までの村名。近世の御笠郡57村の一つである。

太宰府村：明治22年に施行された「市制町村制」により、宰府、北谷、内山を含めた村として成立。

奥村玉蘭が描く宝満山と水城堤



\* この絵から、1800年代初期の里山の姿が良好に解る。宝満山には尾根の一部、水城堤付近は神社境内にしか森林は観られない。水城堤の上はアカマツ林と推定できる。



太宰府町：明治25年～昭和57年の自治体名。最初は御笠郡、明治29年からは筑紫郡に所属。昭和30年水城村と合併し、水城、国分、坂本、観世音寺、吉松、向佐野、通古賀、片野、大佐野を含めた12の大字となる。

太宰府市・筑紫野市：昭和57年に現在の市が成立する。両市の大字は昔の村名である。

このような歴史を辿ると、かつては西国の中心であり、古代から栄えていた「御笠」の名称が、筑紫野市の一地区として残されていることは、日本の歴史上でも貴重な存在であることが判る。福岡県地理全誌に記載されている現御笠地区の、明治初期の各村の記録を次の表に示す。なお、表中の原村は大学に隣接する村である。

| 旧村名    | 天 山     | 牛 島   | 阿志岐     | 吉 木     | 香 園   | 大 石     | 本道寺     | 袖須原   | 原       |
|--------|---------|-------|---------|---------|-------|---------|---------|-------|---------|
| 戸 数    | 51      | 30    | 120     | 133     | 15    | 45      | 57      | 16    | 36      |
| 人 口    | 218     | 148   | 643     | 634     | 78    | 266     | 311     | 127   | 219     |
| 男・女数   | 100・118 | 78・70 | 315・328 | 340・294 | 39・39 | 131・135 | 166・145 | 64・63 | 109・110 |
| 田 畑(町) | 43      | 25    | 124     | 118     | 9     | 17      | 18      | 11    | 37      |
| 山 林    | 33      | 9 4   | 24      | 132     | 128   | 255     | 182     | 157   | 40      |
| 官林     | 23      | 8 9   | 11      | 13      | 9     | 241     | 84      | 75    | 0.1     |
| 草山     | 3 6     | 0 5   | 11 5    | 96      | 106   | 14      | 94      | 44    | 19      |
| その他    | 6 5     |       | 2       | 23      | 13    |         | 4       | 35    | 21      |
| 牛・馬    | 25・4    | 19・   | 90・22   | 94・14   | 17・   | 36・4    | 50・     | 28    | 38      |

#### 各村の山・名所・旧跡等

天 山 村：天山（松立ち）。村では蘆城山と呼ぶ。童男卅女船繫岩。鎮守・高木神社  
 阿志岐村：蘆城山（小松・草立ち）。蘆城城址（天城＝あまがじょう）。荒船神社  
 吉 木 村：唐笠木山（草立ち）、小岳山（小松・茅立ち）、龍ヶ城山（雑木立ち）高良神社  
 小学校（生徒数57・男46、女11）  
 香 園 村：根智山（草立ち）、三尾山（草立ち）、太宰府神社社領 香園天満宮  
 大 石 村：龍ヶ城山（雑木立ち）、竈門山（雑木立ち）、愛岳山（雑木立ち）、大石 高木神社  
 大行事原（草生い茂れり）  
 本道寺村：七尋岩 街道沿いにある。大日岩・大日原 大山祇神社  
 袖須原村：三郡嶽（雑木立ち）竜岩 大山祇神社  
 原 村：下原山、古賀山、七瀬七浦、塚口古墳 竈門神社・大山祇神社

#### 里地・里山 身近な自然

「里山」という用語は、普段は人が入らない自然状態が保たれた「奥山」に対して、日常生活に利用する薪炭林や、農業生産に利用する農用林を指して使われるようになった。常緑樹や落葉樹が混成し、10年～15年周期で伐採され、各種の用途に利用される樹木で構成される林で、雑木林、二次林ともよばれる。現在では谷間の水田や用水路、溜池、草地、さらに、集落周辺の屋敷林や竹林

などを含め里地里山とも呼ばれている。これらの人手が定期的に加えられる環境下では、その環境に依存して安定した生活を行う生きものたちがおり、里地里山はこのような生きものにとって、重要な生息環境となっている。近年、人類の生存にとって生きものと共存し、それらからもたらされる直接、間接の恩恵が必要不可欠であるという、生物多様性の重要性が認識されるようになってきたが、このような観点から里山環境の保全も重要であることがわかってきた。

## 1) 里山と自然の歴史

里山が出現したのは縄文時代中期から後期にかけてであることが、青森県三内丸山遺跡を始めとする各地の遺跡調査から次第に明らかとなってきた。福岡平野でも福岡空港に近い板付遺跡の花粉分析の結果、縄文晩期にはイネ花粉が存在することから水田耕作が確認されている。さらに、ナラ類、アカメガシワ、ムラサキシキブ類、ハゼ類などの二次林要素の花粉が出現しているが、このことは、水田に近い集落の周辺ではすでに里山的環境が出現していたことを示唆している。また、四箇田遺跡の花粉分析からは弥生時代後期に急速に水稻栽培が進んできたことが示唆されており、福岡平野の各地で人口が増え活動が盛んになってきたことが推察される。

弥生晩期から古墳時代に入ると、福岡平野周辺など早くから人間活動が進んで来た地域ではマツ属花粉が急速に増加している。人手が加わることによりマツ林化したと思われる。マツ類は樹脂を多く含むことから火力が強く、古くより製鉄や土器焼成の燃料に使われてきた。アカマツやクロマツなどのマツ類は自然状態では岩尾根など貧栄養の痩せ地でしか生育できず、条件の良い場所では常緑樹に置き換わることから、かなり人為的に育てられたと考えられる。薪や炭は人々の日常生活にも必需品であり、人口の増加とともにその需要も拡大していった。このような人々の活動の拡大から、福岡地方では丘陵部から山麓部、低山にかけて、かなり早い時代から里山が広がっていたと思われる。

## 2) 里山と里人の生活

里山の中心である雑木林の群落形態は、常緑樹二次林、常緑・落葉混交二次林、落葉樹二次林の三つに区分することができ、薪炭、<sup>そだ</sup>粗朶、木灰、用具など利用の仕方により群落形態が異なる。いずれの林も定期的な伐採により萌芽性が強く用途に適した樹種が選択的に残されてきた。また、炭焼き利用では特定の樹種が選別されている場合もある。これらの林は集落近くの平野、丘陵部にある場合が多いが、山が近い場所では山頂部まで雑木林が生育している。山から山麓にかけての雑木林は1950年代までは入会地として共同利用されていたものも多く、10～20年周期で伐採が繰り返されてきた。1960年頃までは各地にススキなどの草に1m前後の木が生えた<sup>しんまつ</sup>薪林地、1～2mの樹木の萌芽が密集した<sup>しんぼう</sup>榛莽地、5～10m程度の萌芽した低木や亜高木が生えた萌芽林であった。また、多くの林ではこの中にアカマツやクスノキの成木がまばらに生えていた。現在各地に残存する雑木林の多くは30～40年を経たものが多く、成長を続けている。

常緑二次林はスダジイ、コジイ、アラカシ、タブノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、クスノキ、クロキなどが高木層や亜高木層、低木層をつくり、多くの個体は伐採が繰り返されたことにより

根元から萌芽している。林床は暗く草はまばらに生える場合が多いが種類は比較的多い。

常緑・落葉混交二次林はアカマツ、アラカシ、クロキ、クスノキ、シャシャンポ、ナナメノキなどと、クヌギ、コナラ、ハゼノキ、リョウブ、ネジキなどの落葉樹が混在して高木層、亜高木層をつくり、低木層ではヒサカキ、ネズミモチ、ユズリハ、シロダモ、タブノキ、スダジイなどの幼樹や、サルトリイバラ、ミツバアケビ、ヤマフジなどの蔓植物が多い。林床は林によってネザサなどのササ類、コシダ、ウラジロなどなどのシダ植物が優占している。現在、アカマツ林は小面積のものが点在するのみで、アカマツが枯れた落葉・常緑混交林となっているものが多い。

落葉樹二次林はコナラ - ノグルミ林、コナラ - クヌギ林などである。高木層にコナラ、クヌギ、ノグルミ、カラズザンショウ、ホウノキ、ハゼノキなどの落葉樹が多く、アカマツ、アラカシ、タブノキ、ヤマモモなどの常緑樹が混じる場合もある。亜高木層や低木層ではクロキ、ヒサカキ、ネズミモチなどの常緑樹が多く、林床は一般にコシダ、ウラジロに覆われ、シダ類がまばらな場合はヤブコウジやヤマツツジなどが生えている。

かつて、集落から近い山の中腹から上には各所に広大な草原があった。これらの草原にはススキ、ネザサをはじめ、マルバハギ、トダシバ、コマツナギ、ワラビなどが生えていた。各地で絶滅した、または絶滅が危惧されているオキナグサ、キキョウ、リンドウ、センブリなども花を咲かせていた。これらの草原は牛馬の飼料を得るために昔から入会地として維持されてきたものである。初秋には近隣の集落から人々が山に入り一斉に草刈りを行い、早春には野焼きを行って草原を維持してきた。

原野には牛馬の飼料としての牧草地のほか、屋根材としての茅場、薪材としての薪秣地や榛莽地などを含んでいる。現在、これらの場所はほとんどがスギ・ヒノキが植林されており、一部は雑木林となっている。

里山の利用...かつて里山とそこに住む生き物たちは、薪や炭、食用として、毎日の生活にとって欠かせないものであった。以下に、北部九州の農村で、生活に利用されていた生物および利用法の一部を示す。

- ・屋敷の垣根...カラタチ、タケ類、ムクゲ
- ・屋敷内...ウメ、カキノキ、ミカン類など果実を付ける樹木
- ・衣類(原料)...アサ、ワタ 糸を紡いで布を織る
- ・染料(布染)...モモ、ウメ、ナスなどのほか、クチナシ、キリ、シイノキ、ヤマモモ、チャノキなど自生の草木
- ・神事(祭等)...サカキ、ヒサカキ、ユズリハ、ウラジロ、サルトリイバラ(がめのは饅頭を作る)シイノキ(宮座の餅つきの杵=牛頭・平野神社)
- ・食用(動物)...ナマズ、ドジョウ、フナ、コイ、タカハヤ、オイカワ、カワニナ、タニシ、シジミ、イナゴ
- (植物)...アケビ、イタドリ、クサイチゴ、クリ、クワ、シャシャンポ(みそんちょ)、シイノキ、スイバ、スギナ(つくし)、セリ、ゼンマイ、ツワブキ、タラノキ、ナ

ワシログミ（ぐみ）、フキ、マキノキ、マテバシイ（またじい）、ムクノキ、ヤマノイモ、ヤマナシ、ヤマモモ、ヨメナ、ヨモギ、ワラビ、アミタケ、コウムキ？、シメジ、ネブシタケ、ハツタケ、マツタケ（樹木は主に実を食べる）

・民間薬…止血 ヨモギ・チドメグサ（揉んで汁を付ける）、ソテツ（黒焼きにして髪油と練り合わせる）

解熱 オオバコ

咳止め ギギ（淡水魚類）の黒焼き

腹痛 ムラサキセンブリ、ゲンノショウコ、ドクダミ（十薬）、クマの胃（動物の胆嚢）

耳疾 ユキノシタ（絞り汁）、ナスの塩漬け（汁をつける）

排膿 ドクダミ（絞り汁）、マムシ（皮を貼る）

火傷 ツワブキの葉（揉んで貼り付ける）、ドジョウの開き（貼り付ける）

頭痛 梅干（肉付の皮をこめかみに貼る）

寝小便 クサギムシ（火であぶって食べさせる）

里地や里山の重要な利用法の一つとして、飢饉の時の救荒食がある。人間が生きていくために、食糧の確保は最低必要な条件である。現代でも地球上では各地で食糧不足のため飢餓の状態にある人々が少なからずいる。日本では、有史以来明治のはじめまで何回となく飢饉が記録されている。特に人口が増加し、社会が安定した江戸時代からは、かなり正確な記録も残されている。中でも、天明、享保の飢饉は有名である。特に享保の飢饉では筑前の国だけでも人口の三分の一が餓死したと伝えられている。福岡平野の中でも各地に餓死した人々を埋めて吊った、餓人塚（餓鬼地蔵）が点在している。

飢饉の時、人々が飢えをしのいだ食べ物が救荒食である。例えば、秋の彼岸頃に田の畦などで赤い花をつけるヒガンバナも、その球根を救荒食にするために植えたといわれている。ヒガンバナは有毒なアルカロイドを含む植物であるが、球根を砕き何日も水に晒して毒抜きをして食べていた。

救荒食にはいろいろな野生の草木が多く利用されているが、救荒食として利用していた生物の記録が、大野城市乙金の大庄屋・高原家文書の中に「救荒便覧概要」として残されている。この書は天保年間に紀州で四巻本として出版されたものを、地方の特性に合わせ、一巻にして読みやすく書き直されたものである。飢饉に際しての心構えが、例を挙げながら細かく解説されており、最後にどのような草木を、どのように処理したら食べられるかが書かれている。さらに、村の長老、または指導者が人々に読み聞かせながら、その土地に産するものを選んで利用するようにと注意書きもなされている。その一部を抜き出すと次のようなものが利用されていた。

・そのまま食べる。

キンセンカ、ヤブラン、カラムシ、チガヤ、マコモ（若芽）、ムクゲ、コノテガシワ、サイカチ、コウゾ、ヤマグワ、ヨシ（根）、コウホネ、コナギ

・乾燥して蓄えておく。

シブガキ、ナツメ、クワノミ、クルミ、ダイコンの葉

サツマイモ...横切りにして串に刺して干し、茎、葉も干して乾かす。

ナス...薄く切って干す。

- ・味噌漬けにする。

マントウグワ...二~三寸に切って味噌漬け、または薄く切って干す。

- ・餅にする。

カラナ...根を撞いて餅にし、蒸して食べる。

ガマ...若芽、根を食べる。根は皮をとり、良く晒した後茹でて麺に挽き、餅として食べる。

ハトムギ...飯に炊く。粥にする。麺として餅にする。酒を造る。煮碎けが多いので粉にして蒸し餅、団子にするのがよい。

キカラスウリ...根を利用。短く切り1日1回水を変えながら4~5日後取り出して撞き、布袋で漉して粉をとる。天花粉。焼き餅、煎餅などにする。

- ・灰汁(アク)汁で茹でて毒抜をし、水に晒す。

ヤマゴボウの白根、ヤマアザミ、ノアザミ、ショウブ...灰汁湯で良く煮晒す、その後水に良く晒して食べる。

- ・茹でて水に晒す。...クコ・アケビ・フジの若芽、マタタビの葉、キキョウ、ギシギシ、ダイオウ

- ・茹でて食べる。...ハコベ、ヒユ、ノビル、ウド、チョロキ、キクの花弁、ギシギシ、ダイオウ、葉ゲイトウ、ヨシ(根、実)、エンジュ(若葉)

- ・調理して貯蔵する。

フキ...唐辛子を入れて生醤油で炒りつけ、蓄えておく。

ツワブキ...何時でも食べるフキと同じ。魚毒を解き、ふぐの毒を消す。干して蓄えておく。

オオバコ・ヨモギ...煮干ししておく。浸し物によい。

- ・米麦・雑穀などに混ぜる。餅にする。

ハス...実：撞き砕き米に混ぜ、かゆ、めし、だんご、蒸し餅などにする。

根：撞き砕き、汁をとり、水に晒して乾し、団子、餅などにする。

オニバス...実：処理法はハスに同じ。7、8月に実をとり、貯蔵して飢饉に備える。茎、葉は皮をとり食べる。茎は3~4月に灰汁湯で茹でる。根はサトイモに似る。

マコモ...地下茎よりでる芽を摘んで米麦と混ぜ、粥として食べる。

ヨシ(ツルヨシ?)...地下茎よりでる芽を摘んで湯引きして食べる。根は生で食べられる。

カラスムギ...殻をとり、撞いて麺とし、蒸して餅にする。

ゼンマイ・ワラビ...根を掘って叩き、水に晒して粉をとる。餅にして食べる。

ヒルガオ...根を掘り、刻んで良く煮て晒し、麦と混ぜて粥にする。食べ続けてはいけな

い。

ト コ 口...葛粉と同じ製法で粉をとる。長く食べて便秘になったら、白米を煮くだして飲めば直る。また、挽き割りを麦と同じように米に混ぜれば上品な味となる。

・薬用にする。

ウコギ 飢人が食あたりしたら、煎じて飲ませる。

このように、飢饉の時は多様な植物が利用されていた。これらの多くは、今も生えている里山の草木や水田、畑、畦畔の雑草である。また、更に食糧が尽きると、鳥獣・魚介の肉、革製道具類や雪駄の鼻緒など革製品を良く煮て食えとも書かれている。サツマイモ、ダイコン葉、ナス、フキ、ワラビ、ゼンマイ、ヨモギ、ノビル、ウド、チョロキなど、この中の少なからぬ種類が現在でも野菜や山野草として食用に利用されており、これらは昔からの生活の知恵であったことがわかる。

## 引用文献

「和名抄」 934年頃に成立

貝原益軒（1703年） 筑前国続風土記

高原家文書（1783年） 救荒便覧概要 \*高原家 = 筑前国御笠郡大庄屋（現：大野城市乙金）

奥村玉蘭（1810年） 筑前名所図会

福岡縣（1882年） 福岡縣地理全誌

西日本新聞社（1982年） 福岡県百科事典

冷川昌彦（2007年） 太宰府市の植生と自然の歴史 太宰府発見塾講演

冷川昌彦（2009年） 日本の植生と里地里山 日本生物教育学会全国大会研究発表

冷川昌彦（2009年） 宝満山の植生史 日本生物教育学会九州支部研究発表

（ひやかわ まさひこ：幼児教育学科 特任教授）